

田端人

芥川龍之介

青空文庫

この度は田端たばたの人々を書かん。こは必ずしも交友ならず。寧ろむし僕ぼくの師友なりと言ふべし。

しもじまいさを
下島勲

下島先生はお医者なり。僕の一家は常に先生の御ご厄介やくかいになる。又空谷くうこくさんじん山人と号し、乞食こつじき俳人せいげつ井月の句を

集めたる井月句集の編者なり。僕とは親子ほど違ふ年なれども、

老来トルストイでも何なんでも読み、論戦に勇なるは敬服すべし。僕

の書画を愛する心は先生に負ふ所少からず。なほ次手ついでに吹聴ふいちやう

すれば、先生は時々夢の中に化ばけものなどに追ひかけられても、

逃げたことは一度もなきよし。先生の胆たん、恐らくは駝鳥だてうの卵より

も大ならん乎か。

かとりほづま
香取秀真

香取先生は通称「お隣の先生」なり。先生の鍔金ちうぎん

家かにして、根岸派ねぎしの歌よみたることは断ことわる必要もあらざるべし。

僕は先生と隣り住みたる為、形の美しさを学びたり。勿論学んで

悉つくしたりとは言はず。且かつ又先生に学ぶ所はまだ沢山たくさんあるやうな

れば、何ごとも僕に盗ぬすめるだけは盗み置かん心がまへなり。その

為にも「お隣の先生」の御寿命ごじゆみやうのいや長ながに長からんことを祈り

奉る。香取先生にも何かと御厄介ごやくかいになること多し。時には叔父をぢを

ひとりひとり持ちたる氣になり、甘つたれることもなきにあらざり。

こすぎみせい
小杉未醒

これも勿論年長者なり。本職の油画や南画以外にも

詩を作り、句を作り、歌を作る。呆あきれはてたる器用人と言ふべし。

和漢の武芸に興味を持つたり、テニスや野球をやつたりする所は

豪傑肌がうけつはだのやうなれども、荒木又右衛門あらきまたゑもんや何かのやうに精悍せいかん一

点張りの野蛮人にはあらず。僕などは何か災難さいなんに出合ひ、誰か

に同情して貰ひたき時には、まづ未醒老人に綿々と愚痴ぐちを述べる

つもりなり。尤ももつと実際述べたことは幸ひにもまだ一度もなし。

鹿島龍蔵かしまりゆうざう これも親子ほど年の違ふ実業家なり。少年西洋

に在りし為、三味線しやみせんや御神燈ごしんとうを見ても遊蕩いうたうを想はず、その

代りに艶なまめきたるランプ・シエドなどを見れば、忽ち遊蕩を想おもふ

よし。書、篆刻てんこく、謡舞うたひまひ、長唄ときはず、常盤津うたぎは、歌沢うたぎは、狂言、テニ

ス、氷こほりすべ、江とうり等通ぜざるものなしと言ふに至つては、誰か唾然あぜん

として驚かざらんや。然れども鹿島さんの多芸なるは僕の尊敬す

るところにあらず。僕の尊敬する所は鹿島さんの「人となり」な

り。鹿島さんの如く、熟して敗れざる底の東京人は今、日既に見るべからず。明日は更に稀なるべし。僕は東京と田舎とを兼ねたる文明的混血児なれども、東京人たる鹿島さんには聖賢相親しむの情——或は狐狸相親しむの情を懐抱せざる能はざるものなり。鹿島さんの再び西洋に遊ばんとするに当り、活字を以て一言を餞す。あんまりランプ・シエドなどに感心して来てはいけません。

室生犀星

これは何度も書いたことあれば、今更言を加へず

ともよし。只僕を僕とも思はずして、「ほら、芥川龍之介、もう好い加減に猿股をはきかへなさい」とか、「そのステッキはよしなさい」とか、入らざる世話を焼く男は余り外にはあらざらん

乎。但し僕をその小言こごとの前に降参するものと思ふべからず。僕には室生むろふの苦手にがてなる議論を吹つかける妙計めうけいあり。

久保田万太郎くぼたまんたろう

これも多言たげんを加ふるを待たず。やはり僕が議論

を吹つかければ、忽ち敬して遠ざくる所は室生と同工異曲なり。

なほ次手に吹ふい聴ちやうすれば、久保田君は酒客しゆかくなれども、(室生

を呼ぶ時は呼び捨てにすれども、久保田君は未だいまに呼び捨てに出

来ず。)海鼠腸このわたを食はず。からすみを食はず、況や烏賊いはんの黒作くろづく

り(これは僕も四五日前ぜんに始めて食ひしものなれども)を食はず。

酒客たらざる僕よりも味覚の進歩せざるは気の毒なり。

北原大輔きたはらだいすけ

これは僕よりも二三歳の年長者なれども、如何いか

にも小面こづらの憎い人物なり。幸さいはひにも僕と同業ならず。若し僕と同業

ならん乎か、僕はこの人の模倣もほうばかりするか、或はこの人を殺したくなるべし。本職は美術学校出の画家なれども、なほ僕の苦手にがてたるを失はず。只僕は捉とらへ次第、北原君の蔵家庭ざうかていを盗み得るに反し、北原君は僕より盗むものなければ、畢ひつきやうとく竟得あついでをするは僕ながら如し。これだけは聊いささか快とするに足る。なほ又次手ついでにつけ加へれば、北原君は底抜けの酒客しゆかくなれども、座さへ酔ようて崩くづしたるを見ず。纔わづかに平生の北原君よりも手軽に正体を露あらはすだけなり。かかる時の北原君の眼はその俊しゆんさう爽さうの色あること、画中の人も及ばざるが如し。北原君の作品は後代恐らくは論ずるものあらん。然れども眼は必ずしも論ずるものありと言ふべからず、即ち北原君の小面憎こづらにくさを説いて酔眼すゐがんに至る所以ゆゑんなり。

(大正十四年二月)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

田端人

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>